

同窓生シリーズ

(41)



第14回生 渡部伸一郎氏

東京大学法学部卒
JSR(株)入社
現在、日本ブチル(株)監査役
句集『蝶』『亜大陸』上梓

はたちすぎればただの人というが、五十すぎれば皆同じだとこの頃思っている。五十になるとインドでは森林にはいつて深く瞑想にふけるので五十すぎを森林期というらしいが、それ程悟ることは出来ないが、人生の経験も積んで自分がどんなものであるかもうすうすは解ってくるものである。五十までは新宿高校の同期の連中とばかりで酒をしまつた飲んだくれていたが、この頃は六十すぎの諸先輩たちと遊ぶことが多い。

そのひとつがゼロの会という絵画展である。毎年秋に合同の絵画展をやって五回をかぞえた。古い絵の先生に吉江さんがおられて、彼は主体展の創立会員で八十になられるが、人望があつた。彼がやたらに芸大にいれてしまったので先輩に画家が多い。僕は絵画部でもなんでもないと素人なのであるが、(在学中は絵が苦手)選択科目でつたこともない、つまり吉江さんとは口もきいたことがない)なぜか絵画展が発足してしまつた。並みいるプロのなかで、しろうとは少数派である。プロも全員の画風がまったく違う。「恥ずかしい

ことはやめなさい」とか皆さんに叱られるが、本人はしれつとして仲間にくわえてもらつていて。先輩のプロたちは、「いなあ、お前、気楽に描いて、俺はプロだから命と生活をかけて描いているのに」となればひやかされ、なかばあきれられている。それでも、先輩というのはいいもので、やめるともいわれない。よきアドバイスをしてくれる。ひとり吉江さんだけが、プロもふくめて、「お前、なんていう絵を描いているんだ、もっとしつかり勉強しろ」と吼えまくるのである。でも吉江さんはとつてもいい人で在学中に描かせた絵を持ってきたりして、「ほら、見ろ、お前ら、高校生のときのほうがよっぽどいい絵を描いてたじゃないか」なんてやられて、並みいるプロも

吉江さんには頭があらがない。一年に一回の会期中は、みなそろそろ会場につめていて、それとなく卒業生が集まつてきて、昼間から酒盛りをしていて。のんびりだということには皆知っているから、酒が山のように集まつてきて、絵を肴にとびきり面白い話を楽しむのである。僕も五十すぎれば皆同じだと思つておめぞくせざ、いい会話を楽しもうとする。五回と回をかさねると気がわかつてきて勉強することも多いのである。

俳句の会もある。圓句会という。先輩に新宿一丁目にパーを開いている伊東陽子さんがおられてパーの名を圓(まどか)という。ほとんど、新宿高校の卒業生の会員クラブと化しているが、店をもりあげるために句会でもやろうじやな、ハ、と

いうことで一月一回ではじめて七年、一回の休みもなく続いている。ここにはありとあらゆる職業とキャラクターが揃つていて。たかが俳句というなにか、皆結構真剣に励んでいる。むずかしいことはいいっこなしである。俳句らしければ七面倒くさい規則にとらわれずなんでもありということにしている。僕はこの頃サラリーマンといわれるよりも、魔人ならぬ俳人といわれることもあるのだが、世話人兼宗匠をやっている。パーだから賑やかに酒を飲みながら句会をするのだ。花見といつては句をつくり、吟行と称しては泊りがけで小旅行をする。なかには、卒業生ならぬ小学校六年生のお嬢ちゃんもいて、いい俳句を作つてきて大人をぎやふんとさせたりしている。大半のいい年を

した男女がなんとか人だしぬこうと思つて、きやつきやいつて遊んでるのである。知的なバトルとでもいえばよろしいか。どうせなら合同句集もだすか、ということになつて、ただいま句集編集中である。

